和気　一成　　*WAKE Issei*

≪授業研究≫

男らしさの可能性―「男性学」再考―

The Future of Masculinity: Reflections on "Men's Studies"

揺らぎ多様化する「男性性」

ここ数年の本授業「男性学入門」への履修希望者の倍率が 5 倍を超えている[1]。タイトルのもの珍しさも手伝ってのことであろうが、いったい近年のジェンダーへの関心、特に多様化する男性性への学生の関心の背景にはどのような世相があるのだろうか[2]。本論では最近話題になったニュース記事に触れながらジェンダー・カテゴリーの自明性の揺らぎについて触れ、男性学の発展の歴史を素描したのち、男性学の授業での学生との質疑応答や、受講生のレスポンス・ペーパーを通して印象に残る特筆すべき点を取り上げることにより、最後に今後の男性学研究の方向性について考察してみたい[3]。

---

[1] 早稲田大学グローバルエデュケーションセンター（通称 GEC）設置科目。早稲田大学の全学部の学生が履修可能な科目である。学生は幾つかの班に分かれ、毎回決められたテーマに沿って事前にリサーチを行い、その研究結果についてパワーポイントを用いて授業にてプレゼンテーションを行う。その他の学生は、発表班によってプレゼンテーション前に課されたディスカッション・トピックについて予習をし、授業内のディスカッションに備える。授業は教員によるイントロダクションに続き、学生のプレゼンテーション、クラス全体（場合によってはグループ単位）でのディスカッション、教員によるまとめ、という形態をとる。本年度 2017 年度の履修者はおよそ 20 名（履修希望者は 100 名以上）、クォーター制のため、秋学期 8 回、冬学期 8 回授業を行う。

[2] 本論での男性性の定義は、レイウィン・コンネルが提唱した男性性を多元的に「複数形」（Masculinities）で捉えるとする定義による。コンネルは歴史的文化的文脈から生まれるジェンダーの差異に注目し、同じ社会・共同体における複数の男らしさの在り方を注視していく研究の重要性を述べている。

[3] 本論は *WASEDA ONLINE* (2016)に掲載された「＜男性学入門＞―男性性の変遷とその背景を学ぶ」をもとに、加筆・修正を加えたものである。

揺らぐジェンダー規範

揺らぐジェンダー・カテゴリーの顕著な例はトランスジェンダー（性別越境者）の人々の日常生活の端々に見ることができる。アメリカではトイレ問題で大論争が起こった。心と体の性が一致しないトランスジェンダーの人々への配慮が高まっている中、2015 年、米国サンフランシスコの小学校では、男女別のトイレを段階的に廃止する取り組みを始めた。同国ミズーリ州ではトランスジェンダーの生徒が女子用のトイレや更衣室を使用したことに抗議して、生徒のおよそ 150 人が授業をボイコットするという騒動が起こる[4]。トランスジェンダーの人々が公共トイレを利用する際に「男女どちら」のトイレを使うべきなのだろうか。

この点に関して、2016 年 3 月アメリカのノースカロライナ州で成立した州法では「出生証明書に記載された性別以外の性の公衆トイレの利用を禁止する」と規定しているが、これに対して「LGBT 差別」だという批判が殺到する。オバマ前政権は 1964 年の公民権法に反するという論拠で同州に対して州法の撤回を要求し、提訴する事態に発展した。それに対して同州は「憲法に書かれていないことに口出しするのは合衆国憲法に反する」として司法省を提訴するという、訴訟合戦に発展することになる。

オバマ前政権時代の 2016 年 5 月には、教育省と法務省は連邦政府から補助金を給付されているすべての学校に対して、「本人が認識している自分の性別（性自認）を、その児童・生徒の性別として扱わなければならない」という通達を出した。当時の政権下では性別に基づく差別を禁止する教育改正法第 9 編「タイトル IX」に基づいて、トランスジェンダーの児童・生徒が保護されていると解釈された。この考えでは、たとえば学校では、トランスジェンダーの児童・生徒が、彼らの出生時の性別（出生証明書と同一の性別）ではなく、本人の性自認に応じたトイレを使用できるようにしなくてはならない、とされ

[4] 「男女別トイレを段階的廃止、米サンフランシスコの小学校」

る。「公立学校でトランスジェンダーの生徒が自認する性に応じたトイレを使用できる」という指針を示したアメリカ連邦政府に対し、テキサス州のケン・パクストン司法長官（共和党）など 11 州は 2016 年 5 月 25 日、指針の無効を求める訴訟に発展した[5]。ミシシッピ、ミネソタ、ジョージアの各州でも同様の動きが見られた。

ドナルド・トランプ大統領政権は 2017 年 2 月 22 日、トランスジェンダーの児童・生徒が自認する性に対応するトイレの使用を許可し学校による「性差別」を禁じる政策を撤回すると発表した[6]。いわゆるオバマ前政権の遺産であるトランスジェンダーの権利保護政策が反故にされてしまった[7]。連邦改正教育法 (Education Amendments of 1972) 第 9 編 (Title 9) が可決されたときには性自認についての議論がなかったために、このトランスジェンダーの問題には適用されえないというのがその論拠である。このようにトランスジェンダーのトイレ使用をめぐる一例を見ても分かるように、ジェンダー・アイデンティティの規範を取り巻く政治的側面と同様にその規範自体が非常に揺らいでいる。

男性性の背景

これまでの男性学では、フェミニズムを中心として現在を「男性問題」の時代と批判的に捉え、新たな時代に男性性のあり方の自明性が揺らぎ「男らしさ」が多様化し揺れ動いているとみなしてきた[8]。欧米においては「マスキュリニティ研究」(Masculinity Studies) として「男らしさ」（男性性）の研究は行われ、日

---

[5] 「トランスジェンダーのトイレ使用をめぐり、11 州がオバマ政権を提訴　なぜ対立が深まったのか【トイレ法案】」

[6] 「トランプ大統領、トランスジェンダー保護政策を撤回　「自認する性に応じたトイレの使用」認められず」

[7] 藤本龍児も「トランプ現象の震源：反グローバリズム？／文化戦争／宗教復興」において、この問題を文化戦争と宗教復興の文脈で取り上げている。

[8] 伊藤公雄『＜男らしさ＞のゆくえ―男性文化の文か社会学』、『男性学入門』などが挙げられる。他には、メンズセンター編『「男らしさ」から「自分らしさ」へ』、同『男たちの＜私＞さがし―ジェンダーとしての男に気づく』などが先駆的な研究書である。

本でも 1990 年代以降「男性学」が発展してきた。その中でまず、先駆的な研究に位置づけられる心理学者の渡辺恒夫は『脱男性の時代—アンドロジナスを目指す文明学』の中で「男性であること」をメリットではなくデメリットであると説き、これまでの押し付けられてきた男性としてのジェンダー・アイデンティティからの脱却の必要性を述べている。渡辺の指摘はのちに社会学者の伊藤公雄や中河伸俊による「脱鎧論」や「男らしさから自分らしさ」という議論に継承されていく[9]。つまり身にまとった男らしさという重い鎧を脱ぎ捨て、楽に自由に生きてはどうかという視点への移行である。

それまでの伝統的な男らしさという鎧を脱ぎ捨て解体し、新たな男性性を模索し構築しつつある若者に対して、年上の男性たちの反応は大きく二つに分けられる[10]。一つは若い男性たちが「男らしさ」を失ってしまっている事態を嘆き、男性がますます女性化し（「フェミ男」がその一例）、それが原因となり国際的な競争力の低下を招き、日本の威信が失墜してしまったとする悲観的な捉え方である。自分たちが教育され内面化しながら体現してきた男性性の崩壊に対する危機感の裏返しであろう。その一方で、若者が体現する新しい男性性に対しての羨望の念が垣間見られる。自分たちは「男なのだから」というがんじがらめの理由から現在の若者が体現する多様な選択肢—時にフェミニンな服装や種々のジェンダー・コードを体現することを許され、時に「男らしさ」という呪縛、その鎧からは比較的解放されているようにさえ見える新世代。そのような羨望に根差した捉え方である[11]。

現代の日本はどのような事情であろうか。フランス通信社 (AFP) は 2015 年 6 月のある記事で、映画『40 歳の童貞男』(*The 40-Year-Old Virgin)* になぞらえ

---

[9] 渡辺恒夫『脱男性の時代—アンドロジナスを目指す文明学』や彼が編集した『男性学の挑戦—Y の悲劇？』。この点に関しては、辻泉『「男らしさ」の快楽』収録、第 1 章「男らしさ」への三次元アプローチ」を参照。

[10] 森岡正博「＜草食系男子＞の現象学的考察」13。

[11] その後の草食系男子の系譜や特に恋愛事情の特徴に関しては森岡正博『草食系男子の恋愛学』、『最後の恋は草食系男子が持ってくる』などが詳しい。

て、40 代で性体験のない日本人男性数が増加していることを取り上げている[12]。（映画『40 歳の童貞男』は 2005 年製作。1 億 7000 万ドルの興行収入を上げる大ヒットとなる。主人公アンディ（スティーヴ・カレル）は、人当たりのよいオタク。趣味が高じて 40 歳にして性体験がない男という設定である。）日本人男性のこういった「オクテな性質」（それが本当に全体的な特徴ならば）の背景には何があるのだろうか。そのような問いはそもそもなぜ生まれてきたのだろうか。ヴァージン（童貞）だということはなぜそもそも不安視され、問題視されなければならないのか。日本のポルノ産業との関係はどうなのか、それが現実世界での恋愛関係に悪しき影響を与えているのか。いわゆる男性の「絶食化」への危惧の背景には、男性は性に対して積極的であれという無意識があることは言うまでもない。今日、これまでにもまして従来のジェンダー観のみならず、とりわけ男性性のあり方が揺らぎ、多様化し、それに付随する諸々の問題が表面化しつつある。

そのようなジェンダー観の揺らぎと葛藤は育児に対しての社会的な反応からもうかがい知ることができる。ある記事が「男性の育休誤解が壁　取得率 3.16%『歓迎されない』と遠慮」と報じた。九州大学大学院の調査によると「育児休業を取得したいが、周囲は歓迎してくれないだろう」男性の育休がなかなか広がらない背景にこうした「誤った」認識があるという。当研究によると、ネット上でのアンケートの結果、職場に育児制度のある 20－40 代の既婚男性は 7 割超が育児を取得する男性を肯定的に捉えている一方、4 割の男性が「他者は（育児休暇取得について）好ましく思っていないだろう」という認識を示したという[13]。多くの企業でダイバーシティ推進が課題となる中、男性の育児への参加も推進していこうという風潮はまだまだ浸透していないと言える。

このような伝統的な男性規範の残滓は「イクメン礼賛」という事象にも見て

---

[12] “Japan’s 40-year-old virgins: Why growing numbers of middle-aged men have never had sex,” *South China Morning Post* 2017 年 9 月 23 日閲覧。
[13] 「男性の育休誤解が壁」

取れる[14]。これまでの主婦というのは「何の生産性もない」と捉えられてきたが、そうではないという「働かないからこそ価値がある」という認識への転換が起こった。さらには「仕事をせず育児に従事する男性」への肯定的見方が生まれ、イクメン礼賛へとつながった。しかしここで危惧すべきは働く男性を否定し（あるいは批判し）、育児に従事する男性を礼賛する（あるいは唯一の選択肢として促進する）といった単純な二項対立の転換であり、むしろ「稼ぐ男性もあり、育児や家事労働に従事する男性もある」という柔軟な価値の多様化こそ推進されていくべきである[15]。

男性性の変遷と「男性学入門」

このような社会的状況下において「男性学入門」を担当して四年目になる。前任の担当者の時もそうであったようだが、受講者の大半が女子学生である。受講の理由には「父親やボーイフレンドとの関係」を見直してみたい、「社会人になる前に自身のジェンダー観を見直しておきたい」、「結婚する前に男性性を形成してきた価値観の歴史性を知っておきたい」などをあげている。一方の男子学生の動機に目をやると、よりいっそう「男道を磨きたい」という動機の他に（そういう趣旨の授業ではないのだが）、自分自身が内面化し良しとしてきたこれまでの「理想の男性像」に違和感を覚え、生きづらさを感じており、それを幅広い視点から見つめなおしたいというものがあった。本授業では、社会的に理想とされる／されない「男性性」の変遷とその社会、歴史的背景を考察していく。学生のリサーチとそれに基づくプレゼンテーション、オーディエンスとのディスカッションという形式をとり、より活発に学生の意見を反映させられる場を提供し、学生が自らの体験を踏まえつつ、主体的に考察を深める場を提供している。

---

[14] 小島と田中（『不自由な男たち』）もこの問題を取り上げている。
[15] 同上、第 4 章参照。

「男性学」の重要なテーマとして、「侍、武士道」といったキーワードから歴史を背景に読み解く男性性の検証、『北斗の拳』や『サザエさん』などのアニメや各種ファッション誌における「食・生活・美容・恋愛」などという項目別にメディアにおいて表象される男性性や、「男の脱毛はもう常識！」、「男性力アップ」、「40 からの肉体改造」などのフレーズがおどる「メンズ脱毛サロンの広告」を通して表象される男性性の検証などがあり、毎回のテーマに沿って議論をする。さらに宗教や慣習、思想などを背景とした国際的男性性の比較研究があり、たとえばその中で、様々な映画を用いて議論を深めてきた[16]。映画『アメリカン・ビューティー』（1999 年）と 2010 年に話題になった定年後のサラリーマンの孤独を描く渡辺淳一の『孤舟』とにみる男性性の問題を論じたある学生のレポートは、本授業の紹介をするのに格好のものである。当の学生は自身の父親の「企業戦士」性を分析してみたいという動機のもとで本授業を履修した。その学生の最終レポートでは歌手山崎ていじの歌詞が引用されている。その歌詞に描かれる昭和生まれの男性性はこう綴られている。

口は重いし　愛想も無いし　思いどおりの　言葉さえ　見つけることもできない俺さ　こんな自分に苦笑い 素直になれず　悔やんでいるよ　やだね　やだね　なぜかつっぱる　昭和生まれの　男唄

当学生が「企業戦士」である父親の精神性を分析することを通して、「昭和育ち世代」の持つ男らしさと、その世代を待ち受けている定年退職後の生活にいかに対応するべきかを考察したのがこのレポートである。高度経済成長期の日本において、経済の成長を担う昭和育ち世代は、幼い頃から競争にさらされ、他人

[16] 『ミセス・ダウト』（1993）、『プリシラ』（1994）、『アメリカン・ビューティー』（1999 年）、『ファイト・クラブ』（1999）、『トランスアメリカ』（2005）、『チョコレート・ドーナツ』（2012）、『わたしはロランス』（2012）、『シークレット・ロード』（2014）などを扱った。

に打ち勝つことを宿命づけられてきた。彼らは自らの存在意義を他人に打ち勝つことの中に見出し、仕事中心以外の生き方を見つけることは困難であった。終身雇用や年功序列を後ろ盾にしたそんな世代に課せられた「使命」は家庭のために自己犠牲的に働くことである。「男は仕事、女は家庭」が当たり前の時代に、彼らは一家の大黒柱として、家族を、そして妻を支え守っていく。このような背景があればこそ彼らの仕事一辺倒のコミュニケーションの「不器用さ」でさえ肯定的に甘受されたのではないか。つまり、当学生は自身の父をこのような「使命」を背負わされ、それを全うしようと奮闘していた「普通の」サラリーマンだった、と結論付けている。このような考察は非常に生産的なものであり、学期を通しての学生の理解度の深まりを嬉しく思う次第である。

ラベリングの裏に潜む「生きづらさ」と新たな可能性の模索

今ではよく知られているように、深澤真紀が 2006 年 10 月、日経ビジネスオンラインの「U35 男子マーケティング図鑑」の中でまじめで優しく、誠実だけれど、なかなか恋愛に関しては積極的になれない「いい人」である男性を「草食系男子・草食男子」と名付けた[17]。（2007 年に『平成男子図鑑』として刊行され、2009 年には『草食男子世代－平成男子図鑑』として文庫化される。）2008 年から 2009 年にかけて「草食系男子・草食男子」という言葉は流行語となり、各種メディアでしきりに取り上げられ人々の日常生活に浸透していくことになる。「人口に膾炙する」につれ、元来の肯定的な意味合いは希薄化し、時に忘却され、多様化していき、人々は様々な異なる意味を付与し始めた。

男性の自殺率の高さが問題として顕在化し、「婚活」プレッシャーに悩み、「イクメン」が称賛され、介護に取り組む「ケアメン」が増えてきた現代、男性

[17] 2009 年 4 月号の *Numero* を監修した深澤は「急増中！今どき草食系男子攻略法」において、広く草食化傾向のみられる男子たちを「草食系男子」と定義し、その中でも特に恋愛・セックスに淡泊な性質を持つ一群を「草食男子」と定義づけ、「草食系男子」と「草食男子」を区別している。

は「漂流」し非常に生きづらい—仕事がつらい、結婚がつらい、価値観の違いがつらい—と言われる[18]。「24 時間戦い」、勝負に勝たなければならない、弱音を吐かず女性を引っ張っていく強くてたくましい戦士の男性像から、「24 時間戦うのはしんどい」と自身のつらさを吐露し弱音を吐けるようになってきた今日、従来の男性性の呪縛からは解放され、多様化していく男性性のカテゴリー。「草食系男子、クリーミー系男子、ロールキャベツ系男子…」などの世界に安住するのではなく、「なぜこのような事態になっているのか」を問い、ラベリングの裏に潜む「生きづらさ」を、社会的、歴史的背景を踏まえて考察していくことを授業では何より大切にしている。

さらに本授業は、単に従来の男性性のあり方を批判的に検証し、従来の男性性のあり方に「異議申し立て」を行うというスタンスのみをとるものではない。そのような作業は今後も必要であろうし、実践的な成果も多く生産的なものであることに異論の余地はない。しかしこのように男性がいかに従来の男性的な規範に縛られジェンダー・アイデンティティを形成してきたか、形成せざるを得なかったのかと「犠牲化」するようなナラティヴには限界があるだろう。辻泉も述べているように「男らしさの鎧を脱ぐこと」や「男らしさから自分らしさ」へといった段階にとどまり続けていては結局男性を「犠牲化」するだけに終始してしまうのではないか[19]。

本授業はむしろ宮台真司他編の『「男らしさ」の快楽』の取るスタンスに賛同するものである。『「男らしさ」の快楽』では、従来の「男らしさ」におけるネガティヴな閉塞的側面を認めつつも、論者がポピュラー文化における男性性についてさまざまな角度から議論を展開し、そこにある「楽しさ」に注目することによって新たな可能性を模索するというものである。本書で取り上げられているテーマは、格闘技や、ラグビーなどの体育会、ホストクラブ、性風俗施設や、オーディオマニア、鉄道マニア、ロック音楽など多岐にわたっている。これまで

[18] 奥田祥子『男性漂流』、田中俊之『男がつらいよ』。
[19] 宮台他編『「男らしさ」の快楽』11。

の男性性をめぐる議論では「男らしさ」は女性を抑圧する高圧的なものとして一枚岩的に捉えられてきた。しかし本書ではその一元化を精査しなおし、「男らしさ」のなかにある多様性（おしゃれやファッションに対する関心が「誰のためでもなく自分のためにやっていること」という認識枠、自己準拠がその例だろう[20]）、複数性に焦点が当てられている。「男性」というジェンダー・カテゴリーに対してそれを一面的に捉え一方的に否定したり肯定したりするのではなく、逆に本質的に執着するのでもなく、むしろ「仮の支え」、男らしさを「鎧」としてではなくて「衣装」のように着替えることが可能なものとして捉えながら、徐々に時代や社会の様々な状況に応じて適用していくことを目指していくというものだ。

このように分断され多様化していく男性性のあり方の中で、「ホモソーシャリティ」再考の必要性が求められる[21]。宮台と辻が述べているように、伊藤公雄の言うような新たな男性性の「再獲得」のプロセスに見られる「自分らしさ」の空回りに陥る若者に対して「自分らしく＋群れよ」という集団＝関係性の構築の必要性を説くよりも、彼らが内包している既存の「男性性」を基盤としつつ絶えず「男性性」をずらす形であらたな男性性を再形成してくようなあり方が今日求められていると本論は考える[22]。ジュディス・バトラーが『ジェンダー・トラブル』において述べている「とりあえずの連帯」という考えは、女性同士の絆のみに適用される概念ではなく、既存のジェンダーの枠組みを絶えずずらしていき、新たな男性性の模索を続けていく上で重要になってくるであろう[23]。また、

---

[20] もちろん「自分のため」のその「自分らしさ」とは「自分らしさ」であるというトートロジカルな解答しか得られないという限界はあるものの、それは従来の男性性の行き詰まりへの処方箋に対しての見直しを迫るものになりうる可能性を持つ（宮台 282）。

[21] 『「男らしさ」の快楽』終章の議論に基づく。

[22] 若桑みどりは『戦争とジェンダー―戦争を起こす男性同盟と平和を創るジェンダー理論』にて「ホモソーシャリティ」が従来の男性性を再強化してしまう可能性を批判的に指摘している。

[23] 宮台、終章 285。

ジュディス・ハルバースタムの提唱する「女性の男性性」の研究の発展的継承など、まだまだ男性学の領域を拡張していく必要性を感じている。

授業を通して、学生の両親が子供たちに教え込んできた「理想的」な種々の男性像が浮き彫りになる。平成生まれながら、昭和生まれの両親からの理想像を教育されてきた学生たち自身が男性というだけで一括りにせず、多様で可変的な男性性のあり方を理解し、新たなる世代へとより柔軟な男性性のあり方を模索し伝えていってくれることを望んでいる。

参考文献

伊藤公雄『＜男らしさ＞のゆくえ―男性文化の文か社会学』新曜社、1993 年。
『男性学入門』作品社、1996 年。

奥田祥子『男性漂流』講談社、2015 年。

小島慶子、田中俊之『不自由な男たち その生きづらさは、どこから来るのか』祥伝社、 2016 年。

田中俊之『男がつらいよ　絶望の時代の希望の男性学』KADOKAWA、2015 年。

辻泉「男らしさ」への三次元アプローチ」宮台真司他編『「男らしさ」の快楽』

深澤真紀 「急増中！今どき草食系男子攻略法」*Numero* 扶桑社、2009 年。
『平成男子図鑑』日経 BP 社、2007 年。
『草食男子世代－平成男子図鑑』光文社、2009 年

藤本龍児「トランプ現象の震源：反グローバリズム？／文化戦争／宗教復興」『米国の対外政策に影響を与える国内的諸要因』日本国際問題研究所、2016 年。

宮台真司他編『「男らしさ」の快楽―ポピュラー文化からみたその実態』勁草書房、2009 年。

メンズセンター編『「男らしさ」から「自分らしさ」へ』かもがわ出版、1996年。

『男たちの＜私＞さがし―ジェンダーとしての男に気づく』かもがわ出版、1997 年。

森岡正博『最後の恋は草食系男子が持ってくる』マガジンハウス、2009 年。

『草食系男子の恋愛学』メディアファクトリー、2010 年。

「＜草食系男子＞の現象学的考察」*The Review of Life Studies.* 第 1 巻（2011 年）13- 28.

若桑みどり『戦争とジェンダー―戦争を起こす男性同盟と平和を創るジェンダー理論』大月書店、2005。

和気一成「＜男性学入門＞―男性性の変遷とその背景を学ぶ」

http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/opinion/society_150928.html

WASEDA ONLINE. 2017 年 9 月 23 日閲覧。

渡辺淳一『孤舟』集英社、2013 年。

渡辺恒夫『脱男性の時代―アンドロジナスを目指す文明学』勁草書房、1986年。

編『男性学の挑戦―Y の悲劇？』新曜社、1989 年。

「男女別トイレを段階的廃止、米サンフランシスコの小学校」

http://www.afpbb.com/articles/-/3060120　AFP. 2017 年 9 月 23 日閲覧。

「男性の育休誤解が壁」https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20170921-00010002-nishinpc-soci　『Yahoo! ニュース』2017 年 9 月 23 日閲覧。

「トランスジェンダーのトイレ使用をめぐり、11 州がオバマ政権を提訴　なぜ対立が深まったのか【トイレ法案】」

http://www.huffingtonpost.jp/2016/05/25/texas-sues-transgender-bathroom_n _10137960.html　HUFFPOST. 2017 年 9 月 23 日閲覧。

「トランプ大統領、トランスジェンダー保護政策を撤回　「自認する性に応じたトイレの使用」認められず」

http://www.huffingtonpost.jp/2017/02/22/trump_n_14949142.html HUFFPOST 2017 年 9 月 23 日閲覧。

Butler, Judith. *Gender Trouble*. New York: Routledge, 1990.

Connell R. W. *Masculinities*. Cambridge: Polity Press, 1995. *The Men and the Boys.* Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 2000.

"Japan's 40-year-old virgins: Why growing numbers of middle-aged men have never had sex" http://www.scmp.com/news/asia/east-asia/article/1818324/japans-40-year-old-virgins-why-growing-numbers-middle-aged-men *South China Morning Post*. 2017 年 9 月 23 日閲覧。